

季刊 | 130. 2009 秋

国立民族学博物館 協力
2009年10月30日発行 第33巻第4号
通巻130号 ISSN 0389-0333

民族学





全専修大学 vs 全日本大学

2004年3月21日 秩父宮ラグビー場

撮影 今野完治



全日本大学 vs 全中央大学

2007年3月21日 秩父宮ラグビー場

撮影 今野完治

群馬県のトンガ教会でおこなわれた子どもの日の集合写真。中列左から3番目に三洋電機や日本代表で活躍した元ラグビー選手のシナリ・ラトマ氏。同じくその右上にはブフォムリ・タウモエフオラウ氏、中列右から4番目にワテソニ・ナモア氏。日本、2009年5月



在日トンガ人 ラグビー選手 グローバルな移動とスポーツ

アムステルダム大学教授 ニコ・ベズニ工

早稲田大学大学院
文学研究科博士後期課程
きたはら たくや
北原 卓也



Tonga

人びとの新しい移動のかたちが、グローバル化の新たな要因のひとつとなつてゐる。この「新しいかたち」にはさまざまなものがあり、旧来の中心—周縁、植民者—被植民者といった関係性のなかでのみ起つるものではなく、移動にかかる人びと自身や、その移動の方法、理由に新しさがみられる。つまり、以前は繋がりのなかつた世界の地域のあいだで、新しい関係性が生まれ、そこには、新たな力関係が現れてきているのである。

「新しいかたち」の移動として、本稿で取りあげるスポーツ選手の移動は、大変興味深いグローバルなものである。じつは、スポーツ選手の移動自体はけつして新しい現象ではない。一九世紀の後半からすでにヨーロッパの国々のあいだでは移動をしており、二〇世紀には、ヨーロッパの枠を超えた彼らの移動によつてスポーツが世界じゅうに普及していった。しかしながら、二〇世紀の終わりには、スポーツ選手の移動は新しい傾向をみせるようになつた。つまり、日本からアメリカへ移動する野球選手などのように、ヨーロッパを介さずに、非常に多くの国や地域のあいだで移動が起つるようになったのである。

スポーツ選手の移動は、社会的、政治的、経済的、文化的文脈のなかで起つる。こうした文脈がスポーツ選手たちの意思決定を促し、逆に

文脈 자체가彼らの移動によつて強く影響を受けていることも多くみられる。本稿では、日本在住のトンガ人ラグビー選手に焦点をあてる上で、世界規模のスポーツ選手の移動について考えてみたい。

トンガ王国とトンガ人の ディアス・ボラ

トンガ王国は西ポリネシア諸島に位置し、人口は一〇万人である。非常に階層的な中央集権社会であり、国王によつて統治されてゐる。一九〇〇年から七〇年まではイギリスと条約を締結し、「保護領」となり、国王による統治は存続しながらも、イギリスから強い影響を受けるという、曖昧な植民地化がおこなわれた。

また、トンガはディアスボラ（離散）社会であるという特徴がある。とくに一九六〇年代から顕著になり、多くのトンガ人が職を求めて移動している。この時期、ニュージーランドではマオリの人びとが地方から都市部へ移りはじめたのをきっかけに、農業や工場での労働力が不足し、政府が「外国人労働者」の政策を打ち出した。移民の制限を解除するこの政策により、トンガ人はより容易にニュージーランドへの移動が可能となつたのである。

世界の同様な政策にもみられるように、多くの労働者は滞在期間を過ぎても帰国せず、ニュージーランドに留まり、なかには、より経済的に豊かなオーストラリアへ移動する者もいた。加えて、米国への移民にはモルモン教が一役買っている。また、いずれの国への移動にも、「教育の王」と呼ばれた、トンガ国王タウファアハウ・トウポウ四世（一九一八—二〇〇六）の影響も大きい。国王は教育を受けることを奨励しており、それは、必然的に国内の教育環境が整っていないトンガを離れ海外の大学などに行くことを意味している。

そのような背景から、現在、ニュージーランド、オーストラリア、および米国には、本国を遥かにしのぐおよそ二十五万人のトンガ人が暮らしている。しかし、移住には、ビザ賃金、仕事の取得などさまざまな困難がともなう。その一面は、移住者の職種からも垣間見ることができ、多くは掃除、庭師、ケアワーカー、皿洗い、空港での手荷物移動の作業といった、いわゆる肉体労働の仕事に従事している。一方、トンガ本国では深刻な雇用不足に悩まされており、仮に職を得ても収入額は非常に少ないというのが現状である。そのため国内経済は、海外在住のトンガ人からの送金に完全に依存しているという状況にある。



空き地でラグビーを楽しむ若者たち。トンガ、2008年8月

南半球のラグビー

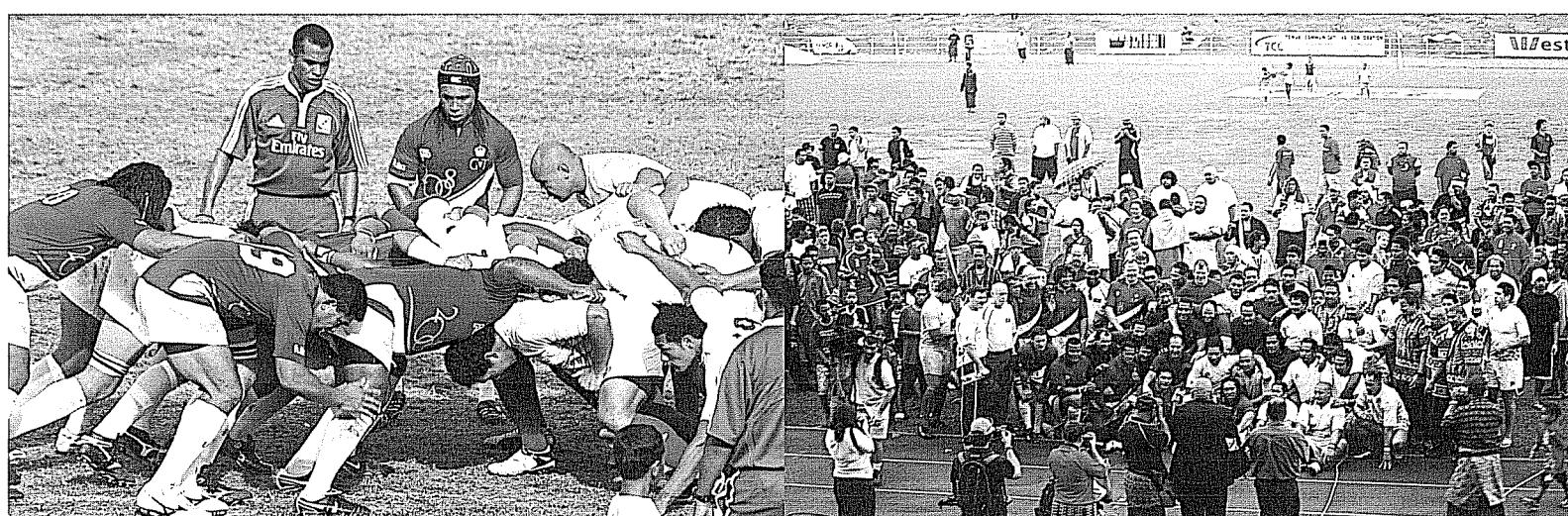
トンガ王国とラグビーの関係を紐解くと、二〇世紀初頭にシドニーのニューウイントン・カレッジに留学した、数名のトンガ人高校生にまでさかのぼる。トンガに帰ってきた高校生が、トンガの若者にラグビーを紹介したのがトンガ・ラグビーのはじまりである。ニューウインントン・カレッジはオーストラリアでラグビーを最初に始めた高校であり、トンガとは、ここで校長を務めていたJ・E・モールトンがトンガに滞在し、一八六六年にトウポウ・カレッジを

開校したというつながらりもある。

二〇世紀の前半には、トンガ人はおもに国内で試合をしており、まれにフィジー・サモアのチームとの対戦をおこなっていた。トンガ代表が国外のニュージーランドで初めて試合をしたのは一九六九年であり、オーストラリアでは一九七三年であった。

現在トンガ王国では、ラグビーは絶大な人気を誇り、国民的スポーツとして認知されている。だけでなく、ラグビー選手は、力強さ、積極性、大きな肉体というトンガの男らしさの象徴とまでなっている。このようなトンガのラグビー熱は、子どもたちのスポーツの嗜好にも影響しており、ほぼすべての少年がラグビーをして遊んでいる。しかし、国内ではラグビーは職業として成り立たず、トンガ代表チーム（イカレ・タヒ 'Ikale Tahi）のメンバーですらほとんどが国外に居住し、国際試合前のトレーニング時のみトンガに集結する。

トンガ人の移住先のなかで、ニュージーランドとオーストラリアはラグビーの人気が非常に高い国である。とくにニュージーランドは、二〇世紀をとおして世界のラグビーの「中心」となっている。しかし、ニュージーランドのプロラグビーには有能な選手が多く、ラグビーへの投資も潤沢なために、選手たちは熾烈な競争を強いられている。加えて、歴史的にみると近年



現トンガ国王の戴冠式を記念しておこなわれた、世界選抜対トンガ選抜の試合。トンガ、2008年7月

記念試合後の写真撮影。運営に携わった、ワテソニ・ナモア氏の姿もみえる。同左

まで、ニュージーランド・ラグビーはトンガなどのポリネシアの選手を差別していた。ニュージーランドでは、太平洋島嶼民は「規律に欠け、頼りにならない」という偏見に満ちたまざしを向けられていたのである。ジョナー・ロムのように、非常に有名になつたトンガ人選手もいるが、そのほとんどがニュージーランド生まれである。ニュージーランド生まれの選手は、トンガ生まれの選手に比べて、恵まれたトレーニングの環境下にあることも成功の大きな要因となっている。

現在、ニュージーランド・ラグビーが「褐色」になつたと言われる原因是、多くのマオリと太平洋島嶼民がプレーしているからである。しかし、マオリや太平洋島嶼民を単に「褐色」とひとくくりに捉えることには限界がある。トンガ人選手のなかには、サモア人選手が他の太平洋島嶼民よりも、幅を利かせていると感じている者がいることからもそれがうかがえる。

在日本トンガ人ラグビー選手と日本のラグビー

トンガ人ラグビー選手来日の経緯は、驚くべきものであった。一九七五年に、トンガ国王タウファアハウ・トウポウ四世が、偶然トンガを訪問していた大東文化大学の会計学教授で、そ

ろばんの指導者でもあった中野敏雄氏へそろばんの指導を要請したことから始まる。国王は何度も日本を訪問するほどの日本びいきで、そろばん教育がトンガの子どもたちの計算力を向上させる手段として有効であると信じていた。中野氏は何度かトンガを訪問するうちに、国王からトンガの若者を日本に留学させ、そろばん教師になるための育成をして欲しいという、さらなる要請を受けることとなつた。

そのような経緯から、一九八〇年に大東文化大学は、トンガからの最初の学生、ホポイ・タイオネ氏とノフォムリ・タウモエフオラウ氏の二人を招いた。その数年後にはシナリ・ラトウ氏とワテソニ・ナモア氏が来日した。彼ら四人は、今日、日本におけるトンガ人ラグビー選手の「パイオニア」と呼ばれている。ラグビー部の部長でもあつた中野氏は、チームの強化とホームシック対策を兼ねて、日本の小学生に交じつてそろばんを習うトンガの若者たちに、ラグビーをさせた。幸か不幸かラグビーで力を發揮した彼らは、トンガでそろばん教師になるといふ当初の目的とは異なり、卒業後も日本でラグビーを続けることになつた。偶然にも社会人ラグビーの発展期初頭に来日した彼らと同様に、大学チームを経て、社会人チームに入団するというトンガ人選手のキャリアパターンは現在でも続いている。



大東文化大学在籍時のルアタンギ・侍・バツベイ氏。
提供・大東文化大学

大東文化大学在籍時のシナリ・ラトウ氏。
提供・大東文化大学

パイオニアたちは、それまでチームプレイが重視されていた日本のラグビー界に、「個の威力」という新しい波をもちこんだ。当時の大学ラグビーは、早稲田大学、明治大学、慶應大学、同志社大学がトップの座を占めていた。しかし、大東文化大学はトンガ人選手の貢献により、その「エリート集団」と争うまでになり、一九八六年、一九八八年には大学選手権で優勝を果たした。

四人のパイオニアのうち三人は、初めて外国人選手として日本代表にも選出されている。二〇〇一年にプロ選手としての雇用が始まって以来、さらに多くのトンガ人選手がプロとして来日するようになつた。現在でも、トンガ人選手はニュージーランド人に次いで、日本における外国人ラグビー選手の中心的存在となつている。パイオニアたちの時代を経て、昨今ではトンガ人選手はさまざまなレベルで来日している。まずは、ラグビー部のさらなる強化を目指す高校や、大学ラグビー新興校への入学である。大学レベルにおいて、早稲田、明治、慶應、同志社といったラグビーの伝統校には、新興校と比べて留学生選手が少ない。それは、すでに全国から才能のある日本人選手が入学しているという点に加え、「伝統校らしさ」の重視によるものであろう。留学に際しての費用は、経済的に厳しいトンガの家庭に代わり、学校側が生活費も続いている。

も含めて負担している。

次に、社会人チームへの入団では、プロ選手や社員として来日する選手がいる。近年では、高校でプレーを始め、大学に進学した後、最終的に企業のチームに入るという、一連の流れでキャリアを積む場合もある。選手を引退した後には、指導する立場になることもしてきた。

また、来日するトンガ人のなかには、ニュージーランド生まれの者も含まれるが、彼らはトンガから来たトンガ人選手よりも優位な条件の下にある。というのは、一般的に先進国の出身者は、職業の選択肢が限られるトンガより、多くの選択肢のひとつとして来日しているからである。トンガ出身の選手は、彼が面倒をみている家族など、外部の要素に強く影響を受ける。一方のニュージーランド出身の選手の行動は、彼ら自身の個人的な判断による。

それゆえ、ニュージーランド出身とトンガ出身のトンガ人選手のあいだには、日本での行動の基準に相違がみられる。

それとは対照的に、日本在住のトンガ人選手自身とその家族が、周囲から非常に恵まれてい

るとみられているのは、格段に多額の送金が可

能だからである。それゆえ、彼らの成功は、トンガに住む家族たちにとつて非常に重要なのである。大学生の選手であつても、わずかな小遣いの大部分を親に送金しているが、その額です

らトンガにおいては高額である。家族や教会、出身村、貴族を支援すること（ファイ・ファトングニア fai fatongia）は、トンガにおいて高い名声を得ることにもつながる。こうした状況は、一人の人間の移動が、その個人のキャリア形成や社会的地位の上昇だけでなく、家族全員や、ときには出身村の人びとにまで関わってくることを示している。

利点と問題点

しかし、環境や条件の面で恵まれている日本

の状況にも変化が起きている。世界経済危機以前はプロ選手としてのある程度の安定した雇用があつたが、昨今、高給取りのプロ外国人選手は、選手としてどれほど実績があつても、契約更新されない。日本ラグビーフットボール協会

の規定では、日本の社会人ラグビーの上位十四チームから成る全国リーグである、トップリーグにおいては、一度にフィールドに出られる外

シーズンあるいはエキシビジョンマッチへの参 加だけのために来日し、一時的に滞在してプレーする選手もいるが、彼らはすでに国際的にトップレベルにある場合が多い。

いずれの場合でも、トンガ人のラグビー選手は、ほかの移住者とは異なり、高度なスキルをもつた移住者として日本に来ている。ラグビーリアでは、（国の代表クラスを除いて）給料はとても少額で、日本ほどの福利厚生（乗用車、住宅、休暇、食事）は整っていない。トンガ代表チームにいたつては、トンガ・ラグビー・フットボール協会内の権力争いや汚職が原因で、わずかな代表報酬すら支払われないこともあります。実質的に給料はゼロといえる。

それとは対照的に、日本在住のトンガ人選手はけつしてありえない利点である。さらに、一人までと決められているため、雇用する企業は



大東文化大学ラグビー部現キャプテン、レプハ・ラトウイラ選手は、7人制ラグビーにも選出された実績がある。提供・大東文化大学

コストパフォーマンスを考えざるをえない。それゆえに、場合によつては、チームは選手に日本国籍を取得するように積極的に勧めている。契約が更新されないということは、選手とその家族は日本を離れ、再び移動を余儀なくされるということを意味している。多くの子どもを抱えている選手も少なくなく、移動は、とくに子どもの教育にとっても、大きな問題となる。

日常生活のなかにも、日本社会への適応の困難さが表れる。慣れない社会では、生活必需品の入手といった基本的なことも、所属する会社や大学などに頼らざるをえない。その困難の象徴は「言語」である。たとえ日本語が流暢であつたとしても、言語に付随する文化的な要素を理解しない限り、彼らのみで生活することは難しい。したがつて、現役引退後、とりわけ日本社会へ適応できなかつた選手が職を得ることは至難の業であるため、日本に滞在しつづけること 자체が非現実的だろう。このような困難な状況のなかでも、トンガ人選手はよくトンガの文化と日本の文化について、両者ともに伝統を重んじるところなどを挙げて、類似性を主張する。しかし、一方の日本人は「外国人」というひとくくりのステレオタイプに当てはめていることが多いのではないだろうか。

加えて、家庭内でも親と子どもに世代間のギャップが生まれている。あるトンガ人選手の妻

は、子どもたちが教育を日本語で受けているため宿題を見てあげることができないと言う。また、トンガ人にとって英語ができることはステータスであるが、日本で教育を受ける子どもたちは、英語が話せるようにならないことにも危機感をいだいている。かといって、多くの子どもを抱える両親には、インターナショナル・スクールに通わせるまでの経済的な余裕はないのが実情である。

選手の日常生活というミクロな事柄から、日本のラグビー界全体に目を向けると、そこにも問題点は存在する。トンガ人選手が来日するようになつた初期の段階では、彼らはその肉体的強靭さが評価されており、チームの中心的ポジションであるナンバー・エイトやセンターでプレーするために採用されていた。しかし、彼らの活躍とは裏腹に、日本におけるスポーツという大きな枠組みでは、ラグビー自体があまりポピュラーではない。それは、ニュージーランドやオーストラリアに比べ、メディアでの露出の少なさにも表れている。選手にとってそれはサッカーや野球の選手のように、宣伝広告による収入が期待できないことを意味している。それどころか、経済危機により一部のチームは廃部に追い込まれる可能性すらあるのである。

さらに広くインターナショナルな視点からみると、日本のラグビーはトップレベルではない。

人びとのグローバルな移動を追つて

世界規模で展開するスポーツは、それに関わる、影響を受けるさまざまな人びとのあいだに新たな可能性と問題を生み出している。ここでいう「人びと」とは、スポーツ選手自身はもちろん、その家族や親族、同僚の選手、チームのスタッフ、雇用する企業、チームや選手のファン、それぞれの政府などを指すものである。

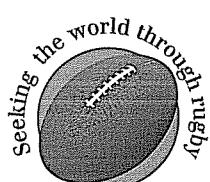
また、スポーツ選手のグローバルな移動が起る背景は複雑であり、多くの要素が含まれている。それゆえスポーツをみていくことで、さまざまなトピックがみいだせる。たとえば、ジンジャーの文化的概念や、それぞれの社会でのキャリアの形成がもつ意味の違い、長距離にまたがる親族関係などである。

トンガ人選手たちは日本のチームをトップレベルにしたいと願つてゐる一方で、契約終了後には、ニュージーランド、オーストラリア、イギリスなどヨーロッパへのチームへの移籍の可能性も視野に入れている。国際ラグビー評議会（I.R.B）が定める、選手が生涯で代表選手に所属できるのは一カ国のみとする規則も、さらには、さまざまな地域における比較をおこなうことにより、世界規模で移動する人びとをめぐる文化や社会の動態が明らかになつてくるだろう。

あげた在日トンガ人ラグビー選手の移動、すなはちスポーツ選手の移動は、多様な移動の様相のひとつである。ラグビー選手以外のトンガ人も移動しているし、トンガ人に限らず、エンターテイナー（芸能人）、サービス従事者などの他職種でも移動はみられる。

謝辞

本稿の執筆においては、鈴木伸枝先生、山本まゆみ先生、瀬戸邦弘先生、青柳寛先生にご協力、ご助言を頂いた。また、日本学術振興会より研究助成を頂いた。ここに記して深く感謝申し上げたい。



Tonga

ラグビーからみる世界